

## 新羅国原小京（中原京）の立地に関する歴史地理学的検討

轟 博 志\*

### I. 序 論

韓国忠清北道忠州市に位置した新羅時代の副都・中原京は、その歴史的象徴性と、中央塔や中原高句麗碑などの遺跡が現存することもあって、早くからその立地についても関心が集まり、また発掘調査や研究の蓄積も進んできた。しかし立地に関する見解は多岐にわたり、いまだ決定的な学説を見ていない。以下に見るように、大きく分けると「塔坪里説」と「忠州市内説」<sup>1)</sup>に分かれ、現在に至るまで相互に新たな研究成果を発表し続けている。

「忠州市内説」に立つ朴泰愚<sup>2)</sup>は忠州市内の丘陵地域に沿って一部残存している、いわゆる「逢峴城」が、国原小京城の可能性があったとした。『三国史記』地理志に「国原小京の延長は2,592歩」とあるが、これらの長さは周尺換算で約3,100mであり、忠州周辺に分布する山城にはそれほどの規模のものは存在しないことから、山城には比定できず、逢峴城しか候補があり得ないとした。

山田隆文<sup>3)</sup>も朴の論文も引用しつつ、朴説と同じ忠州市内立地説をとっている。ただし朴が現地調査と地形図分析をもとに示した逢峴城の国原京城説については「近年の遺

跡地図<sup>4)</sup>には掲載されていない」ことを理由に可能性が低いとし、一方で忠州南郊に方格地割が一部見られるとして、これをもとに国原京（中原京）は、東西方向及び南北方向にそれぞれ6坊以上の条坊があったとしている<sup>5)</sup>。

山田はまた西側に10度ほど傾斜した条坊制の施行を仮定しているが、これは1万分の1の地形図を根拠に想定したものであり、正確さを欠く。黄仁鎬<sup>6)</sup>はさらに条坊の尺度も高麗尺をもとに詳細に提示し、王京（慶州）との都市計画の共通性を指摘しているが、やはり地形図に依っており、論文中では地籍原図レベルのミクロな復原案は提示されていない。また方格地割画定の基準点はどこであったのかといった基本的な根拠が示されていない。朴は逆に方格地割に関しては触れておらず、このようにほぼ同じ場所に比定しながらも、その内容は研究者ごとに食い違う。

田中俊明<sup>7)</sup>も「中原高句麗碑が発見されるなど高句麗の勢力圏であった塔坪里一帯から、新羅は意識的に離れたところに小京を設置したと想像される」として、朴の説を支持しており、また条坊の存在についても可能性を否定していない。しかし高句麗の滅亡後に築造された国原小京城が、そうした立地原

\* 立命館アジア太平洋大学

キーワード：国原小京、中原京、新羅、地籍原図、忠州

Key words : Gukwonsogyong, Jungwongyeong, Silla, Land Registration map, Chungju

理を採らねばならなかった理由については、「意識的」以上には明確に述べていない。

忠清北道文化財研究所と忠州市が行った忠州邑城遺跡に関する調査報告書<sup>8)</sup>でも忠州市内説を採っており、高句麗の国原城は塔坪里方面であったが、新羅の国原小京（中原京）造営によって現忠州市内に移動したと主張している。ただし、朴が忠州邑城<sup>9)</sup>と逢峴城は別々の時期の築造であり、前者は高麗時代に築造され、朝鮮王朝時代に改修されたものであり、後者のみが新羅時代に築造されたとするのに対し、忠清北道文化財研究所は両者とも新羅による築造で、それぞれ内城と外城の役割を果たしていたとする点が異なる。

一方の張俊植<sup>10)</sup>は「忠州市内説」に反対の立場を鮮明にし、逢峴城は中原京城に比定しえないとする。その理由として、上記『三国史記』地理志の「国原小京の延長は2,592歩」とあるのを、これは唐尺で換算すると約4.6 kmとなるが、朴等の比定した逢峴城の周囲は約6 kmであるので、規模が合わないこと、張が逢峴城を巡検した結果、国原小京時代の遺物を発見できなかったこと、そして周囲に同時代の古墳の存在が確認できない<sup>11)</sup>こと等を挙げている。その上で、中央塔があり同時代の古墳群に囲まれた塔坪里一帯が、中原京跡であると断定している。ただし張は、塔坪里地域に約4.6 km規模の羅城が存在するかについては言及しておらず、後述の文化財調査においても確認されていない。また採用する尺度に対して問題提起したのは重要だが、それに対して持論を示せていない。

さらに2012年に国立中原文化財研究所が、忠州市可金面塔坪里一帯に対して行った試掘調査及び翌年の発掘調査<sup>12)</sup>でも、塔坪里が中原京跡の推定地であることを前提とし

た調査であることが明記されており、張の学説をとっている。同研究所と同時期に隣接地域を調査した中央文化財研究院と忠州市の発掘調査（2013）<sup>13)</sup>においても、「国原小京及び中原京の研究に重要な示唆を与える」として、断定はしていないものの、当該地が小京の比定地である可能性に言及している。このように、両説並立の構図が本稿の執筆完了時点（2015年5月）まで続いている。

両説を折衷する案として、最近黄仁鎬<sup>14)</sup>は新羅国原小京の設置当初は塔坪里所在であったが、羅唐戦争による防衛上の必要から現忠州市内に逢峴城が築造され、終戦後にそこへ小京が移転して都市羅城化したとした。盧秉湜<sup>15)</sup>も移動説をとっているが、国原小京城を逢峴城ではなく大林山城に比定している。

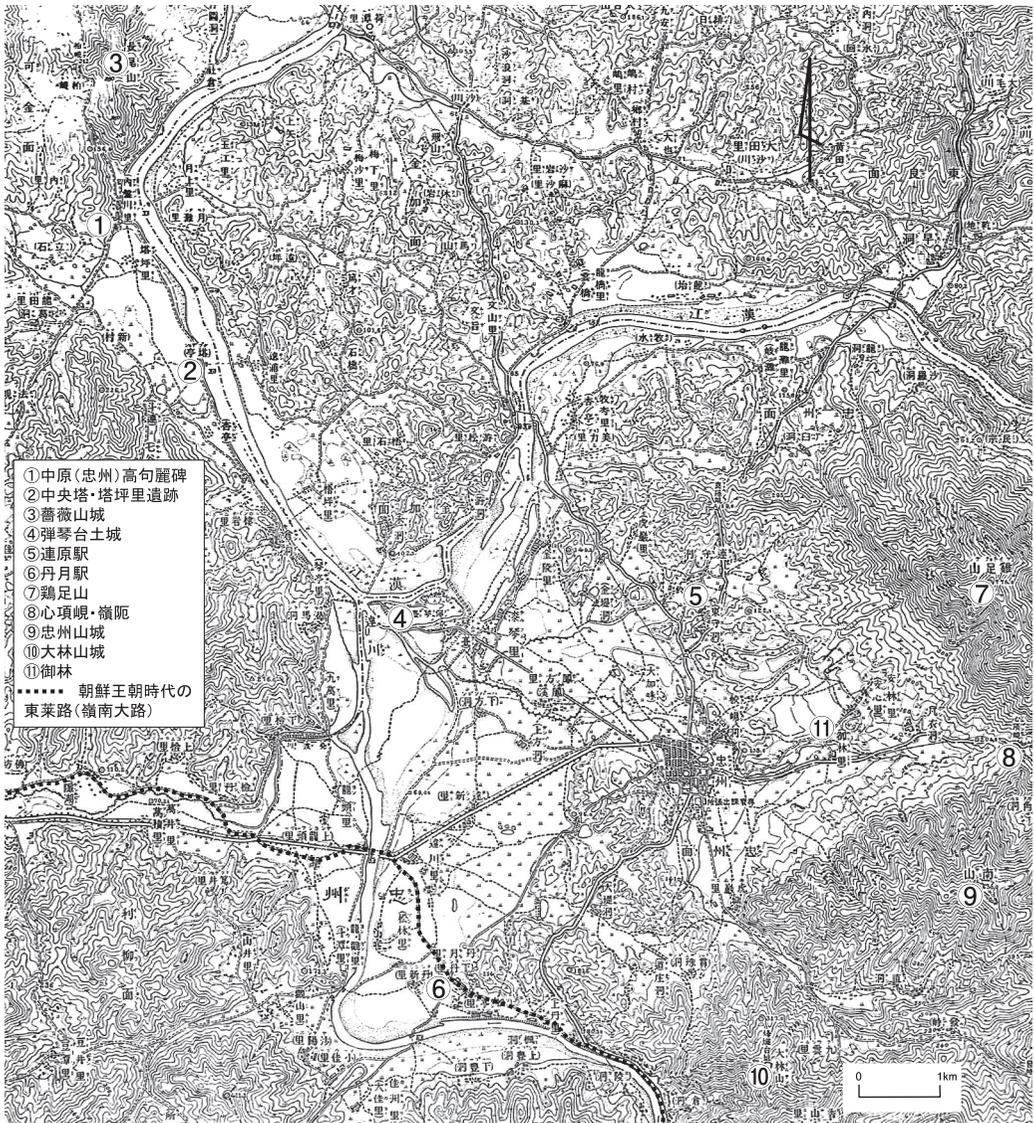
以上のように、発掘の進展によって考古学界による国原小京城の立地研究は活発であるものの、大きくは二つの立地説及び両者間の移動説が未だに併存し、また忠州市内説の中での逢峴城説・大林山城説・無羅城説など、研究者ごとに細部の構造について異見がある。さらに城内の京城構造についても、方格構造であることは解明されつつあるが、街路の画定基準や条坊数などに検討の余地がある。こうした現況の中で、現状では欠如している歴史地理学的な観点から、国原小京の立地説の確定には至らずとも、一定の視点を提供することが本稿の目的である。

具体的には、巨視的な観点を加味しつつ微視的な立地や構造を検討し、両者の比較の中から立地原理を探り出す方法を採用。巨視的な検討では首都（王京）や他都市との関係、地形との関係、水陸交通路体系との関係、小京や州治の移動状況などを中心に概観する。

特に都市の立地を点ではなく、移動の歴史を地理的な位置関係から把握する研究が多くないので、九州五小京の他都市の状況と比較しつつ、文献資料をもとに重点的に検討する（第II章）。

微視的な検討では、都市と城郭の関係、道路や水路との接続、都市内の街路構造や官衙

の立地などが検討の対象となる。特に先行研究では欠落していた、日本統治期に朝鮮総督府臨時土地調査局が作成した千二百分の一の地籍原図を用いた羅城および条坊の遺存地割の有無についても検討を加える。先行研究でも地図類を利用した分析は行っており、山田<sup>16)</sup>や黄のように一部には条坊の検出を試



第1図 国原小京（忠州、中原京）周辺の地域概観図

陸地測量部作成 五万分の一地形図「忠州」（1915年）を基図に作成

みたものもある<sup>17)</sup>。しかしそれは一万分の一の地形図までのスケールに限られ、地籍原図等を使用した微視的な分析は、中心部のごく一部を除いて行われていない<sup>18)</sup>。本稿では中心部以外にも地籍原図調査の範囲を初めて広げる。最後に両スケールの分析結果に先行研究の成果を照合し、国原小京の立地原理についての仮説を提示する。

本研究は上記のような国原小京の立地論争に歴史地理学の立場から意見することが目的であるので、研究対象地域はほぼ国原小京が立地していた忠清北道忠州市に限定される。研究対象とする時期は、歴史書から国原小京の形成が確認できる新羅上代後期から中代前期<sup>19)</sup>を中心とし、必要に応じてそれ以外の時代に関しても言及する。

研究方法としては、筆者が溟州において行った研究手法<sup>20)</sup>を踏襲し、先行研究や郷土史料、考古資料を用いた文献研究、日本統治期に作成された地形図や地籍原図等を用いた地図分析、現地の景観調査の三段階で行われる。なお次章で述べるように国原小京の呼称は時期によって一定しないが、本稿では便宜上、「国原小京」に統一する。

## II. 忠州地域の概観と国原小京の成立経緯

### 1. 忠州地域の概観

国原小京が立地した忠清北道忠州市は、朝鮮半島中部の内陸、南漢江の中流に位置する。南方には黄海に注ぐ漢江水系と、釜山を河口とする洛東江水系の分水界をなす小白山脈（白頭大幹）<sup>21)</sup>が聳えている。市街地は南漢江と達川が合する広い盆地の南にあり、周囲は穀倉地帯となっている。

朝鮮王朝初期の儒学者である鄭麟趾（1396-1478）は「拱南方咽喉之地」と記し、同じく洪貴達は「中原南北之街岐面踰二嶺<sup>22)</sup>」と記している<sup>23)</sup>。それらの言葉のごとく、古くから小白山脈を越えて慶尚道方面に行く陸上交通の要衝となっていた。『三国史記』には新羅の阿達尼師今三（156）年に、鶏立嶺路が開通したと記されている<sup>24)</sup>。この時期の慶尚道はまだ小国分立の時期で、新羅の勢力範囲は鶏立嶺まで達していなかったため、記述の信憑性に疑問もある。ただ少なくとも、慶尚道聞慶から鶏立嶺を通じて忠州に行く道が、古くから新羅の北方への幹線ルートであったことを示唆している記述といえよう。朝鮮王朝時代には鶏立嶺の南側に隣接して鳥嶺が拓かれたが、依然として峠越えの拠点には忠州であった。日本統治期に改修された車両用の国道（一等道路京城釜山線）は、さらに南隣の梨花嶺を通ったが、やはり忠州邑内を通過するルートを選んだ。現在はほぼ同様のコースを中部内陸高速道路が貫通している。

南漢江は前近代から日本統治期にかけて河川物流の大動脈であり、忠州地域にも牧溪や可興などの市場機能を兼ねた河岸集落が存在した。また軍事移動や官吏の移動などにも漢城（ソウル）から忠州までは水路を利用し、忠州から陸路で峠越えをする方式がとられることがあり、忠州は水陸交通の結節点としての機能も果たした。

このように忠州は、内陸交通の要衝であることと、肥沃な盆地であることによって、古代から現代まで、中部内陸地方の拠点都市であり続けた。それがために、三国時代には百済・高句麗・新羅の勢力争いの場となり、後三国時代、蒙古襲来、文禄の役、朝鮮戦争な

ど歴史の節目節目においても主戦場になった。

忠州は三韓時代には馬韓に属していた。百濟近肖古王五（350）年、百濟が当地を占領して娘子谷城を造ることにより、歴史に初めて登場する。高句麗の長寿王六十三（475）年、高句麗が奪取して国原城を築造した。忠州市可金面にある中原高句麗碑は、この時期に建てられたと考えられる。当時の国原城もこの周辺にあったと考えられ、周囲には高句麗や百濟の手による山城も布陣する。当時の首都平壤から南進してきた高句麗としては、有事の防衛や撤退を考えれば、南漢江の北西方向に国原城を立地させることが合理的であっただろう。それは漢城の阿且（峨嵯）山城や大同江北岸の平壤城、鴨緑江北岸の国内城も同様である。

新羅真興王十二（551）年までに新羅は国原城を奪取して、十八（557）年には国原小京を置き、神文王五（685）年には中原小京に、景德王十六（757）年には中原京に改称した。高麗の太祖二十三（940）年に忠州府と改称し、初めて忠州の名が使用された。朝鮮王朝世宗三十一（1449）年には忠清道監營<sup>25)</sup>が置かれ、大韓帝国建陽元（1896）年には全国13道制の施行に伴い忠清北道庁が置かれた。道庁は隆熙二（1908）年に清州に移転するが、これは京釜線鉄道の開通により国土南北の交通軸が忠州経由ではなく、西寄りに移転したことを示す。

## 2. 国原小京の立地と移動

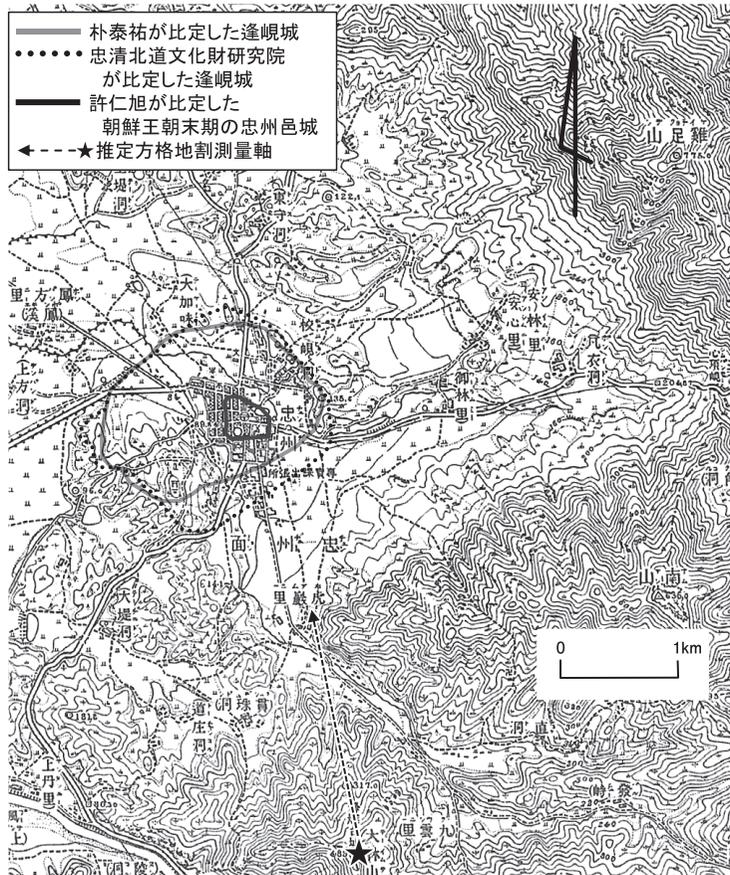
国原小京は、五小京の中ではその起源が最も古い小京である。上述のように真興王十八（557）年に設置され、翌年には王族・貴族の子弟や六部<sup>26)</sup>の有力民を移住させて、国原を充実させた<sup>27)</sup>。

つまり国原の占領から最低6年の間に、そ

の場所を副都とし、当時の新羅領北辺における新羅文化・社会の中心地となしたのである。軍事都市としての「州」ではない副都としての「京」とした背景には、当該時期における新羅の急速な北方領域拡張がある。

当時の漢江流域は高句麗と百濟の激戦地であったが、真興王はそれに割入る形で、国原城を足掛かりにしてこの地域における領域拡張を推し進めた。十四（553）年の秋七月には「百濟の東北部を奪い取って新州<sup>28)</sup>を置き、阿滄の（金）武力を軍主<sup>29)</sup>とした。十六年（555）に王は北漢山<sup>30)</sup>まで巡幸し、その地までが新羅の領土であることを宣布した<sup>31)</sup>。さらに557年、つまり国原小京の設置と同じ年に、新州を廃止して北漢山州を置いた。高句麗との境界線が北上し、南漢江流域は比較的 안전한後方地帯になったことから、小京の設置に至ったと解釈できる。なお、北漢山州は二十九（568）年にいったん廃止され、州治は南川州<sup>32)</sup>へと後退したのち、真平王二十五（604）年に北漢山城に侵入した高句麗を、王が一万の軍を率いて撃退した翌年に、北漢山州は復置された。このことは王都より辺境に至るまで、王が迅速に親征することができる交通路が確保されていたことを示唆する。

逆に国原小京の設置以前に遡ると、智証麻立干十五（514）年に「春正月、阿尸村に小京を置いた。秋七月、六部及び南部の住人を移して、この小京を充実させた<sup>33)</sup>」とある。阿尸村小京は記録に残る最初の小京であるが、現在では義城郡安溪面説が有力になっている<sup>34)</sup>。すると、やはり国原小京や北漢山州方面へ向かう経路上に小京があったことになり、時期的に国原小京の前身であった可能性がある。この経路は忠州から白頭大幹を



第2図 先行研究による逢城（国原小京城）の領域復原  
陸地測量部作成 五万分の一地形図「忠州」（1915年）を基図に作成

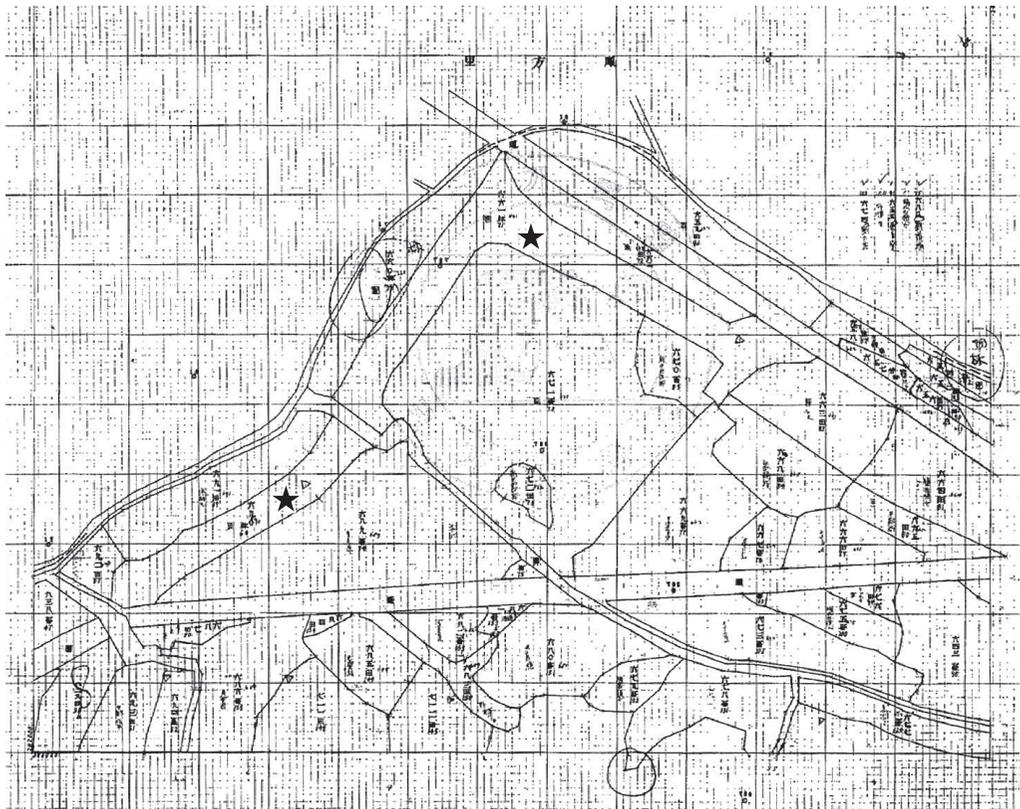
越えて聞慶～安溪駅～軍威～永川～慶州へ向かう朝鮮王朝の官道（蔚山路）とほぼ一致しており<sup>35)</sup>、慶州と国原小京、さらには中国方面を結ぶ最短経路になっている。

ここまでの小京や州の設置および移動の経過を見ると、阿尸村（義城）～国原（忠州）～南川（利川）～新州（広州）～北漢山（ソウル）の間の一列の線を行き来していることに気付く。この経路は即ち朝鮮王朝時代の太白山路そのものであり、また現在の国道3号線（京忠街道）そのものでもある。

以上のことから、小京や州の立地動向と国家の交通軸形成は、不可分の関係であった可

能性が提起される。陸上交通路と地方拠点都市との地理的關係は他の交通軸や他の小京・州でも確認できるが、本稿は国原小京に関する事例研究が主題であるので、別稿に譲る。

高句麗時代における国原城の構造については記録がなく、あるのは新羅の占領以降である。『三国史記』地理誌には「文武王代に（当時の国原京に）周囲2,592歩の城を築いた」とあり、同新羅本記には具体的に「文武王十三（673）年九月、国原城（分注：古菴長城）を築いた」とあり、菴長は国原の別名であることから、両者は同じ城郭を指しているものと思われ、高句麗時代の国原城とは別の城を



第3図 地籍原図に残る逢城羅城の痕跡（図中★印の区画。第4図の③の部分）。  
朝鮮総督府臨時土地調査局作成、千二百分の一地籍原図「龍山洞」（1915年）部分。

新築したことがわかる。この時期は羅唐連合軍が百済と新羅を滅ぼした後、麗済両国の故地を新羅と唐の間で奪い合っていた時期であり、また両国の残党の反乱に苦慮していた時期であった。防衛を主目的とした都市ではなかった国原小京に、この時期城郭が築かれたのは、そうした背景と無関係ではなからう。

### Ⅲ. 地籍原図に現れた逢峴城（推定国原小京城）

本章では地籍原図レベルでの国原小京城の痕跡の検証を試みる。ただし塔坪里におい

ては、地籍原図上で都市化が可能な地域での城郭が一切検出されず、事実上京城を伴う都市城郭は存在しないと判断せざるを得ない。残る可能性は薔薇山城など周囲の山城が国原小京城であるかどうかだが、地籍原図が存在しないうえ、京城の存在が想定しえない山城である。そのため本稿においてはまず、地籍資料が比較的充実している忠州市内説に立った検証を中心に進めることとする。

第Ⅰ章で詳述したように、忠州市内の逢峴城は多くの先行研究で国原小京城に推定されているが、その領域の比定方法は旧製地形図と現地調査の結果を、記録に残る全周長に当てはめたものであった。従って地形図や現

状の景観に残っていない部分については極めて不正確であり、同じ逢峴城説をとる研究者の間でも大きな差異がある(第2図)。拙稿<sup>36)</sup>で示したように日本統治期の地籍原図を使用すれば、より大縮尺の検討ができるのみならず、遺存地割の検出を通じてより詳細な羅城跡の比定が可能となろう。

地籍原図では多くの山林は省略されたり、遺存地割の確認が不可能なほど大雑把な筆地のみ存在する場合が多い。ただし山林部は逆に先行研究や発掘調査で断続的に羅城の痕跡が明らかにされているので、それを手がかりにどの筆地内を通過しているかを推定することができる。逢峴城の東北壁と西南壁はほぼこれに該当する。一方の平地では稠密な地割がなされているので、地形図では判別しづらい具体的な遺存地割を検出できる区間が出てくる。

特に忠州古城の西北壁が地籍原図上でもっとも明瞭に確認できる(第3図)。忠州川の兩岸から、西南方向と東北方向の丘陵部までの平地を、一直線に塞ぐような形で、細長く真っ直ぐな地目が連続している。それらは「城」地目ではないものの、その形態から城壁跡である可能性が高いと思われる。忠州川の東北側(校峴洞)では田<sup>37)</sup>地目、西南側(竜山洞)では林地になっている。またそれぞれの城壁の西北側、つまり外側には、校峴洞では畚<sup>38)</sup>地目が、竜山洞では田地目が、ほぼ同じ形状で並行している。これは恐らく濠を巡らしたものと考えられ、ちょうど太宰府の水城と類似した構造であったと推測される。

城壁は忠州川の部分のみ内側、つまり東南方向にほぼ直角に凹み、校峴川と虎岩川が合流して忠州川となるとところに達している。河川自体を防衛体系の一部となし、さらに城壁

の凹部が甕城のような形態をつくることで、防衛力を高めているものと推測される。凹みの部分と忠州川南岸の間に、日本統治期に改修される前の道路が通り、途中で分岐して一本は濠の外側に沿って達川渡方面に行き、一本は弾琴台方面に延びている。恐らくこれが新羅時代の漢州及び唐項城<sup>39)</sup>へ向かう駅路なのではないかと考えられる。達川渡方面への道は龍山里と虎岩里の境界になっており、これは市街地区画整理が施行された現在も変更がないので、境界線を基準に付近の新旧の地籍原図を比較することで、濠の位置と羅城の位置をほぼ正確に比定できる。

するとこれらの道と城壁の交点に北門が置かれたのではないか。ちょうど交点で道幅が若干広がっている事実が、そうした推定を補強する。逆に忠州川の両脇には羅城が欠けている範囲が400mほど存在するが、地形からかつては川幅が広がったか氾濫原であったと推測される。するとここが国原小京における南漢江水運の拠点となった可能性もあろう。

これは太宰府の水城や大野城が羅唐連合軍の襲撃を想定した防備施設であるのと同様に、明らかに国原小京を基準に朝鮮半島の西北方向、さらには大陸方面を意識した防衛体系である。先述のように国原小京城が羅唐戦争の最中である673年に築造されている記録から、対唐防衛を想定したのであろう。新羅は聖徳王二十一(722)年にも対日本防衛を目的として首都王京南郊に「関門城」を築造する<sup>40)</sup>が、類似した構造であった可能性もあろう。つまり逢峴城は、都市羅城であると同時に関門としての役割を持っていたと考えられる。

日本統治期の五万分の一地形図には忠州川

の西側の羅城のみ描かれている。一万分の一地形図には両側の羅城痕跡が、先述の凹部も含め何らかの形で描かれているが、先行研究で一部しか認識できていないのは、地籍原図と照合しないとそれと判別できない水準の描写方法であるためと考えられる。

城壁はそのまま両端の丘陵上にも続いて国原小京を取り囲み、西北方面からの敵軍の侵入を防ぐ構造になっていた。丘陵部の一部は、日本統治期の地形図でも羅城の跡が確認できる（第1図）。一方の平野部は地形図には一部しか痕跡を残さず、地籍原図でのみ全体像の確認が可能だ。忠清北道文化財研究院の報告<sup>41)</sup>では地籍原図レベルの調査は行わず推定したと見え、当該区間の羅城復原図には少なからぬ誤差がある。

残る東南壁もほぼ平地であるが、朴論文や忠清北道文化財研究院の報告書に示された経路での羅城の遺存地割は、ほとんど確認できない。かわりに、東南壁のある忠州邑城から南方、大林山城に向けて、山田が指摘しているように、方格地割の痕跡が地形図で確認できる。また次章で説明するように、筆者が確認した結果、地籍原図ではより詳細な方格地割が検出された（第4図）。するとこの地点での逢峴城羅城と方格地割の関係は、

- ① 先にあった羅城を取り崩して方格地割を施した
- ② 方格地割が先にあり、羅城が初めからその部分のみ省略された
- ③ 方格地割が先にあり、その部分のみ方格地割に沿って羅城が施された
- ④ 方格地割の南端よりも外側に羅城が通った

などの四通りが考えられよう。

第IV章で指摘するように、『大東地志』の

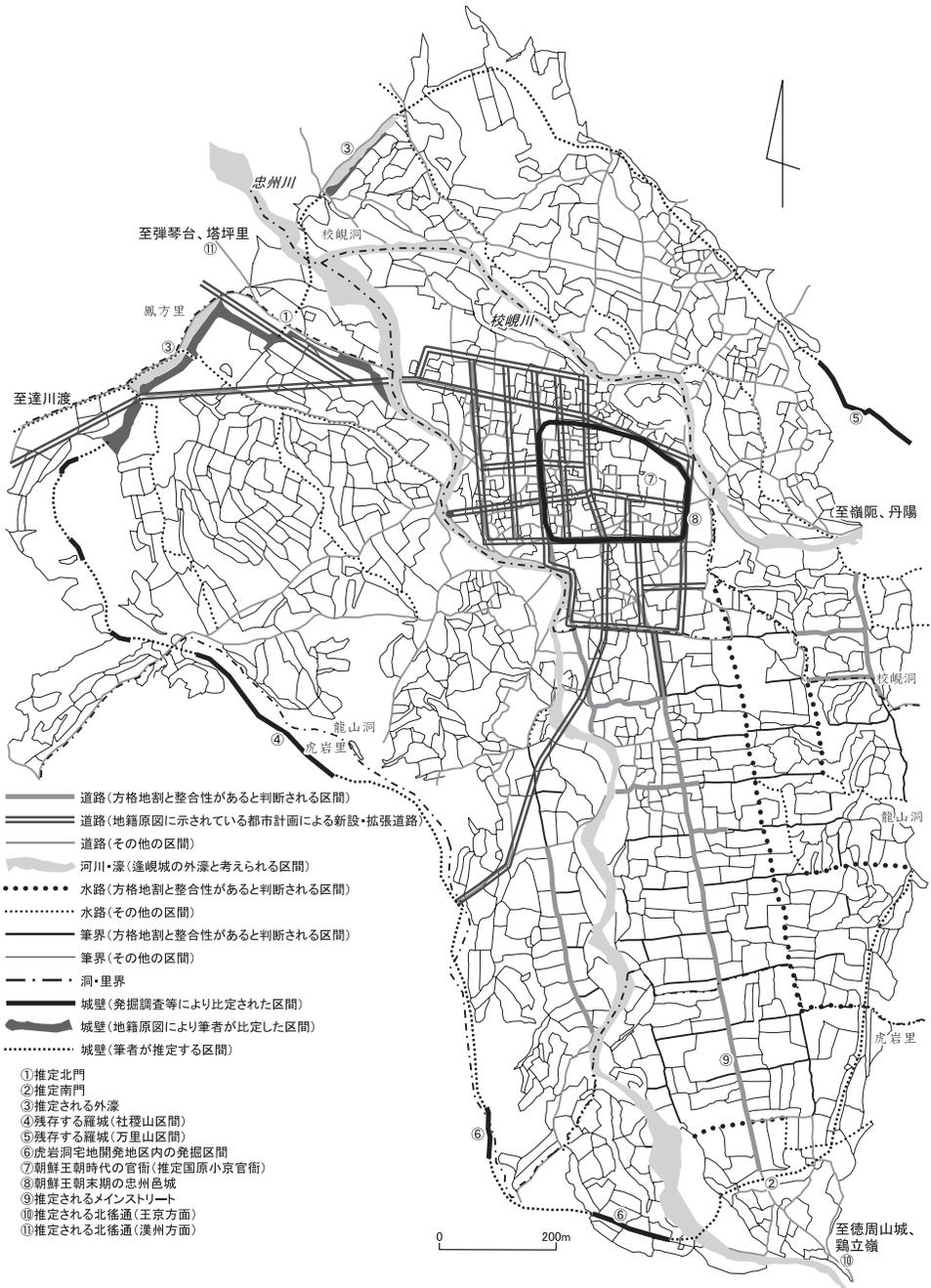
記述から国原小京城には南門が存在したと考えられることから、②の可能性は低い。地籍原図では竜山洞と虎岩里、また竜山洞と校峴洞の洞里境界線の一部が段状になっており、明らかに方格地割に規制されている。逢峴城の東南壁が方格地割と関係ない方向で築造されていたならば、洞里境界線は方格地割よりも、羅城に沿ってひかれたのではないか。

また、前述のように国原小京の設置が557年で、そこに築城したのが673年であるから、一世紀以上も後のことになる。副都として「宮」ではなく六部貴族の移植を伴った「小京」である以上、都市集落としての「京城」があったはずであり、それが多くの先行研究が言及しているように、王京の都市構造の縮小版であったとすれば、小京の設置とは条坊の施行と同義かつ同時であったと考えられる。実際に五小京の全てにおいて、規模の差はあれ方格地割が確認されていることから、この考え方は説得力を持つと考える。従って方格地割の施行が先であり、羅城が後となる。かかる前後関係は筆者が別稿で指摘した溟州（江陵）の場合と同様である。すると①の説も可能性が低いことになる。

地籍原図に現れないので発掘が行われていない段階での推定であるが、恐らく③か④のように方格地割の中間または南端の東西軸に沿って羅城が施され、それと後述するメインストリートとの交点に南門があったのではないか。少なくとも、朴論文<sup>42)</sup>や忠清北道文化財研究院の復原図にあるような、方格地割を斜めに横切るような羅城には、疑問を呈せざるを得ない。地籍原図にはその代り、上記の推定南門から東北方向に、羅城を思わせる帯状の地割が見え、その東側では方格地割は姿を消している。この区間は全く発

掘調査が行われていないが、羅城が存在していた可能性を指摘しておく。

さらに、2014年に東亜細亜文化財研究院が行った虎岩宅地開発予定地区に対する試



第4図 地籍原図を用いた逢峴城及び国原小京方格地割の比定

朝鮮総督府臨時土地調査局作成、千二百分の一地籍原図「龍山洞」「虎岩里」「忠州邑」「鳳方里」「校峴洞」(1915年)を基図に作成

掘調査で、東西方向及び南北方向の土城痕跡が確認され、本稿の投稿時点（2015年5月）で発掘調査が進行中である<sup>43)</sup>。現段階の分析では工法や出土遺物の類似性や、城壁の方向から、それまでに確認された逢峴城と一体のものであると考えられている。すると逢峴城は上記④のように、方格地割の南端、恐らく忠州川の北岸もしくは南岸を通してメインストリートと交差していたのであろう。遺存地割から、北岸の可能性が高いと考えられる（第4図）。社稷山に残る発掘調査済みの羅城からこの羅城まではまだ調査がされていないが、この間は丘の稜線に沿って龍山洞と虎岩里の境界線が通っており、恐らくこの線に沿って羅城が通っていたのではないか。

なお前述のように、黄<sup>44)</sup>は羅唐戦争の防御施設として逢峴城が造られた後に、国原小京が塔坪里から移転してきたとしているが、周囲に山城がある条件下で、都市を伴わない防御施設として大規模な平地域を造営したとは考え難い。まず京城があって、それに合わせた羅城を後から施したと見るのが自然だろう。

国原小京のすぐ南側は大林山城、東南側は忠州山城である。北と西は河川に守られているものの、ほぼ平野である。そこでその方向に羅城を巡らすことにより、平地に広い京城を持ちながらも、国原小京は堅固な防衛体制を持つことになる。東側にも鶏鳴山と忠州山城の間を通る嶺陁<sup>45)</sup>と呼ばれる長城が約700m残存しており、これが新羅時代のものであるとすると、逢峴城・大林山城・忠州山城・鶏鳴山に囲まれた広大な領域が国原小京城内となる可能性もある。すると新羅または後三国時代の離宮と伝えられる御林<sup>46)</sup>も城郭の範囲内となり、御林が城外となる不自然

が解消される。

嶺陁が国原小京城の一部であってもなくとも、『三国史記』に記録された2,592歩では、朴の言う高麗尺を使用した約4.5kmと換算しても、忠清北道文化財研究院の言う一等田尺や布帛尺を使用した約6kmとしても、長さが足りなくなる。筆者も溟州の事例で適用したように<sup>47)</sup>、城郭は一等田尺の近似値から求めるのが最も正確であるという立場だが、それでも不足するとなれば、城郭が完全に都市を囲郭していない可能性を考慮せねばならない。具体的には、南山の西麓から鶏鳴山の西麓までは羅城が存在せず、上記の嶺陁で代替させれば距離的な辻褃は合うので、その可能性を提起しておく。

もしこれが高句麗や高麗時代、朝鮮王朝時代における対南方防衛用であるとする、こうした城郭の構造は全く意味をなさないことになる。そうした点からも、逢峴城は新羅による国原小京城であると断じて問題ないとする。そもそも南方の敵を意識した都市ならば、南方ではなく北方に山城と退路としての交通路を持った立地を選定したはずであり、それこそ塔坪里のような場所が候補となったはずである。このような点からも、筆者は国原小京塔坪里説を支持しない。

#### IV. 地籍原図に現れた国原小京の方格地割と官衙の立地

地籍原図を見ると、地形図では断片的にしか現れなかった遺存方格地割が、より明瞭な形で、連続的に検出される（第4図）。道路のみならず、溝や単純筆界も方格状に現れるからだ。また、方格地割の中心をほぼ南北に、西に約10度傾きながら、広めの道路が通っ

ていることが確認できる。地籍原図によって東西方向の条坊の間隔を平均してみると、この道路のみ約200m、含まない区画が約180mである。約40mの余剰帯があるこの部分を、メインストリートと見てよからう。

山田<sup>48)</sup>は条坊の間隔を地形図から160mないし180mとしており、黄<sup>49)</sup>はこれを高麗尺が使用されたとみて450尺ないし500尺としている。地籍原図で測定するとそれぞれ20mほど長く、黄の測定に倣えば一坊の東西は500(100歩)尺で、メインストリートは恐らく100尺(20歩、約36m)として設計されたのではないか。山田は坊数を「東西・南北とも6坊以上」としているが、地籍原図の測定結果、地形に合わせて条坊数はかなり不規則であることがわかる。むしろメインストリートを基準として、官衙より南側の平地の範囲一杯に、出来る限り方格地割を施したと見る方が妥当であろう。

方格地割が若干西に傾いているのは、忠州の主山である大林山(標高497.5m)から官衙の所在地に向けて基準線を引いたからであろう(第2図)。この基準線はメインストリートの一筋東側の街路と一致するので、基準線が即ちメインストリートとはならなかったことがわかる。

この道路はさらに方格地割の区間を抜けても、引き続き東向きを変えて一本道で続き、発峙を越えて徳周山城、弥勒寺址、鶏立嶺を経て慶州方面に向かう。朝鮮王朝時代に慶州を含む慶尚道方面へ行く道、つまり嶺南大路(東萊路)は、忠州から達川沿いに香山里まで行き、さらに鳥嶺を経て聞慶へ向かった(第1図)。この間特に丹月洞から香山里までは達川と大林山城の間の攻撃斜面であり、朝鮮王朝時代には現在の国道(旧道)と

同じ経路に栈道が設けられていた。この栈道の開設時期は明らかではないが、方格地割が新羅時代のものとの前提に立てば、新羅時代にはこの道ではなく、方格街路の延長線上から、上記のような経路で徳周山城を経由した可能性が高い。

このコースならば、鶏立嶺経由でも大きな迂回路にはならず、むしろ自然な最短距離となる。朝鮮王朝時代の香山里経由に比べて峠越えの数は三か所から二か所に減る。代わりに中間に関門を設けることで、要害としての役割を果たす。実際に徳周山城は統一新羅時代の包谷式山城で、当該道路を遮断する関門を兼ねていた<sup>50)</sup>。さらに徳周山城から国原小京へ進入する直前には、ともに三国時代に築造された大林山城と忠州山城(南山城)に挟まれた谷筋を通る。ここも防衛の要衝であると同時に、非常時の展望・退避・籠城場所を提供している。これらのことから、このルートが表通りだった可能性が指摘できる。

『輿地図書』<sup>51)</sup>の「忠原県地図」には、このルートがはっきり描かれている。並行して朝鮮王朝時代の嶺南大路も描かれているが、前者は細線、後者は太線で表現されており、既に嶺南大路がメインルートになっていることがわかる<sup>52)</sup>。一方新羅時代のルートも月岳山の西側の「聞慶界」まで続いており、朝鮮王朝時代になお慶尚道方面への道と認識されていたことがわかる。

方格地割は、この幹線道路にまつわって施行された可能性が高く、新羅の駅路計画と小京の都市計画が一体であった可能性もある。方格の遺存地割は道路の他に、田畑の筆界、さらには水路によっても区分されている。上記の基準線は、地籍原図では道路ではなく水路(溝)と記されているが、これは水路の流

路変更も同時に行われたからであろう。基準線道路の一筋西側は中間部分の地割が消失しているが、これはほぼ並行している忠州川によって攪乱されたか、またはかつて河道そのものが、やはり方格地割に沿っていた可能性が提起できる。明瞭ではないが、地籍原図にはその痕跡であることが疑われる筆界も一部にある。その場合上記の水路と合わせて、方格地割の施行に伴って大規模な河川の改修も伴ったことになる。これを正確に証明するには、自然地理学的な検証も必要となろう。

これらが全て都市域だったのか、井田も含んでいたかは発掘調査を待たねばならないだろう。ただ一体的な領域として認識され、羅城がその間を横断していた可能性が極めて低いことは確かである。また竜山洞の中心集落は「サチョンゲ (사천개)」という集落名であるが、四方向から水路が直交する場所であるからという説や、国原小京城の別称が「沙川城 (사천성)」であり、サチョンゲ付近に六部の貴族が住んでいたからという説もある<sup>53)</sup>。

直交する水路というのは方格地割に沿った水路の付け替えを想起させるし、六部の貴族が居住していたというのは、前述の『三国史記』の「真興王十八 (557) 年には国原に小京を置き、翌年には王族・貴族の子弟や六部の有力民を移住させて、国原を充実させた<sup>54)</sup>」との記録を想起させる。伽耶貴族出身の官僚である強首は「中原京沙梁部人」と記録されているが<sup>55)</sup>、サチョンゲは移住させられた王京六部人のうち沙梁 (사리암) 部人の居住地であった可能性もあろう。どちらも集落の伝承であり確証はないが、方格地割の残存地域一帯の住民が、国原小京を想起させる認識を伝えていることは、ここが京城で

あった可能性を示すものと言える。

方格地割の北端はほぼ朝鮮王朝時代の忠州邑城である。現在「忠州邑城」として知られている城郭は、復元されている朝鮮王朝時代の官衙周辺に存在し、日本統治期に撤去された。築造時期は明らかではなく、ただ朝鮮後期の高宗六 (1869) 年に最後に改築したことが知られる<sup>56)</sup>。その規模は史料によって異なる。

『世宗実録』地理志では周囲が 680 歩 (約 1,586 m)、『新增東国輿地勝覽』では 3,650 尺 (約 1,703 m)、『輿地圖書』では 730 歩かつ 3,650 尺 (同)、『忠州郡邑誌』では 3,950 尺 (約 1,842 m) である。時代が下がるにつれて若干ずつ大きくなっているが、誤差なのか修築の結果なのか、現時点では不明である。

ただ一つ、『大東地志』のみ周囲 2,592 歩 (約 6,047 m) としており、他の史料の三倍以上となっている。これは前出の『三国史記』の記述に依っているもの、つまり逢岷城を指していると考えられる。1869 年の改修後の地理誌は城門が東西南北四か所、それ以前の状況を記した地理誌は西南北の三か所としているが、『大東地志』のみ南門と北門の二箇所であることから、これも国原小京当時の状況を反映してある可能性があろう。日清戦争直後の 1896 年に作成された地形図 (第 5 図) には、四か所の門が確認できる。

忠清北道文化財研究院の報告では、上記の尺度を認定しながらも、1869 年の改築で逆に全周 1,225 m に縮小されたと、矛盾した見解が記されている。1,225 m とは营造尺 (約 31 cm) を換算した場合であり、1869 年以前の邑城では布帛尺 (約 46.66 cm) で換算している。筆者が先だって溟州の事例で明らかにしたように<sup>57)</sup>、城郭の尺度は通常布帛尺を使用

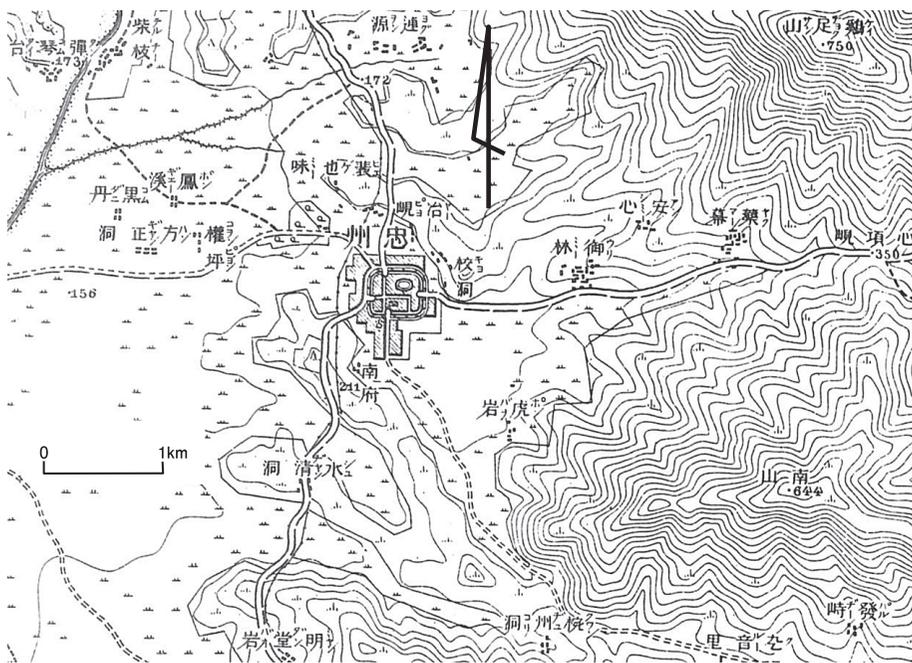
していると考えられるので、1,225 mは1,843 mの誤りであろう。当該報告では、地籍図から推定された邑城跡から逆算すると布帛尺より营造尺が近いからという説明がなされているが、それならば1869年以前の邑城が推定邑城より小さかった可能性の方を追求すべきだろう。

朝鮮王朝時代の官衙敷地内で七世紀以降の新羅時代の瓦や土器類が多く出土していることと、南北及び東西方向の石列が試掘されていることから<sup>58)</sup>、国原小京の時代から朝鮮王朝時代までほぼ同じ位置に官衙があり、高麗時代以降に官衙周辺のみで縮小した邑城が新築された可能性がある。さらに官衙の座向も、メインストリートの方向ではなく朝鮮王朝時代と同じ正南向であった可能性がある。つまり方格地割の方向も、官衙の部分と他の京城では異なっていた可能性があ

る。まだ正式な発掘はされていないので、ここでは可能性の提示にとどめておく。

前出の「忠原県地図」でも、新羅時代の慶尚道方面への官道は南門から南方へ発し、嶺南大路は東門から発する。この位置関係からも、忠州邑城の位置が国原小京の官衙跡であったことが斟酌させる。なお、忠清北道文化財研究所は、出土品を根拠に国原小京も外城と内城の二重郭構造であったとしている。出土品から国原小京の官衙があったことは想定できるが、当時の内城もあったと断ずるのは、該当する構造物が発掘されていない現時点では飛躍だろう。恐らく新羅時代の官衙の衙門は、慶州から来た道路の終端に位置したのではないかと。すると国原小京の都市構造は全てこの道路を基準としていたことになる。

ところで、朝鮮王朝時代の忠州邑城と、官衙を中心とした国原小京の立地が同じ位置



第5図 日清戦争直後の地形図に描かれた忠州邑城。角が丸みを帯びた長方形をしている。  
陸地測量部作成、五万分の一地形図「忠州」、1896年

であると考え、今一つの理由は、風水との関係である。高麗時代中期以降に新たに立地選定がなされた地方都市（邑治）は、ほとんどが朝鮮式沢地風水の基本である「背山臨水」の原則に基いて立地する<sup>59)</sup>。つまり都市の北側には主山が聳え、南側には河川が流れる場所である。高麗の首都開城や朝鮮の首都漢城（ソウル）からしてそうである。しかし忠州邑城は河川南側の平地に位置し、主山である大林山は真南にある。つまり風水地理説に依拠した立地ではない。

このような傾向は西原京（清州）、北原京（原州）など他の小京の中でもみられ、溟州（江陵）、尚州、武州（光州）、全州、朔州（春川）、良州（梁山）などの州治も同様である。「背山臨水」となっている都市もあるが、南原京や金海京のように主山と都市が離れている等、地形上偶然そういう配置になったと考えられる場合もある。そもそも首都王京の故地に立地する慶州邑城も、風水とは無関係な立地である。

このような風水に依拠しない都市の立地は、それが古代由来の立地を継承している可能性を示すと考えられる。もちろん朝鮮王朝時代にも、交通上の利便を優先して風水地理説に必ずしも合致しない場所に移転した、水原や大邱のような例外もあるので、他の要素と併せて総合的に判断する必要があるが、少なくとも古代都市立地の候補地を絞ることはできる。

## V. 結 論

本稿では、立地に関して論争が続いている新羅の副都である国原小京（中原京）の立地について、今まで研究に参加してこなかった歴

史地理学の立場から検討を行った。特に国原小京では投稿時点ではなされていない近代の地籍原図を活用した微視的な分析も行った。導き出された結果は、大きく以下の三つに集約される。

まず巨視的に見た国原小京の立地であるが、首都王京（慶州）を基準として、三国時代末期に対立していた高句麗や唐、靺鞨といった北方勢力に対抗できるよう、南漢江の南側かつ小白山脈（白頭大幹）の北側、つまり現在の忠州市街地に立地し、有事の際の防戦や退却を容易にした。国原小京城の築造もそうした防衛思想の一環であったと思われる。そう考えると、羅城の痕跡が存在せず、南漢江の西北に位置する塔坪里説は、立地の合理性に欠けることとなり、むしろ高句麗時代の国原城に比定できよう。また阿尸村小京や新川州、南川州など国原小京に関連する州や小京の立地変遷は王京を中心とした放射状の線上を、当時の前線に影響されつつ行き来している。詳しくは別稿で検討するが、小京や州の立地を幹線道路の路線が相互に影響しあう関係であったことが想定される。以上の地理的關係は他の小京でも観察されることから、小京の共通の立地原理であった可能性が提起できる。

次に国原小京城の比定であるが、塔坪里では地籍原図にて都市城郭が検出されない反面、忠州市内では、多くの研究者が比定している逢峴城において、羅城の遺存地割と思われる区画が検出された。特に西北方向に向けて、太宰府における水城のような形態の平地城壁が検出されたことから、巨視的立地の項で指摘したことと同様に、北方勢力への備えとして羅城が建設されていたことが形態面から推定される。既存の研究では菱形の形態

であったと言われていたが、近年における発掘調査の成果と、後述する方格地割との関係から、平野部のほぼ南端までを包む楕円形であった可能性が高く、大林山城や忠州山城と一体であった可能性が高まった。また単なる防御用の羅城としては明らかに大規模であるので、歴史記録との整合性を考えると、もともと国原小京設置時からあった京城を、羅唐戦争時に羅城で取り囲んだ可能性が高いと判断する。

先行研究が地形図で推定していた京城の方格地割は、今回地籍原図を使うことで、より詳細に明らかになった。特に東西五坊以上、南北十五坊以上が存在し、条坊数の均等性を考えたというより、条里のごとく平地部分を方格地割で埋めることを目的にした地割であると考えられる。地籍原図上発峙方面へ向かう道に接続している道路が基準線、かつ王京に続くメインストリートと考えられ、それは大林山の頂上を測量基準としたこと、またその影響で条坊が平行四辺形になっていることなどが明らかになった。さらに当時の官衙の所在は朝鮮王朝時代のそれと変わらず、その衙門からメインストリートが発していたと想定できた。

以上の三点から、国原小京には不定形だが明確な京城が存在し、有事に備えた立地選定、城郭設備、幹線道路との接続を行っていたことが提起できた。これらの地理的特性は、五小京全てに当てはまる可能性が高く、今後他の事例も精査してゆく予定である。

#### 注

- 1) 両説の呼称は便宜上筆者が各々の所在地から命名した。
- 2) 朴 泰祐『統一新羅時代の地方都市に対する研究』、忠南大学校修学位論文、1987、44-49

頁（韓国語）。

- 3) 山田隆文「新羅の九州五小京城郭の構造と実態について—統一新羅による計画都市の復元研究—」、考古学論叢 31、2008、38 頁。
- 4) 山田は該当文献を明示していないが、忠北大学校中原文化研究所『文化遺蹟分布地図—忠州市—』、忠州市、1998 を指すと思われる。
- 5) 正確には、南北軸が西に約 10 度振れているとする。これは筆者も確認した。
- 6) 黄 仁鎬「新羅九州五小京の都市構造研究」、中央考古研究 15、2014、133-141 頁（韓国語）。
- 7) 田中俊明「中原小京の諸問題—特に国原小京の意義」、先史と古代 34、245 頁（韓国語）。
- 8) 『忠州邑城学術調査報告書』忠清北道文化財研究院学術調査報告書 25、136-140 頁。
- 9) 高麗時代及び朝鮮王朝時代の文献に確認される邑城で、ほぼ忠州官衙を取り囲む形の小規模なものであった。第 IV 章で詳説。
- 10) 張 俊植「新羅中原京」、国立清州博物館特別展示図録「国原城・国原小京・中原京」所収論文、190-191 頁（韓国語）。
- 11) 実際には丹月洞古墳群など、数か所で確認されている。
- 12) 『忠州塔坪里遺蹟（中原京推定地）発掘調査報告書』、国立中原文化研究所学術調査報告書第 12 冊、2013、12-13 頁。
- 13) 『忠州塔坪里彈琴湖漕艇競技場造成敷地内忠州塔坪里遺蹟』、発掘調査報告第 201 冊、中央文化財研究院・忠州市、2013、592-593 頁。
- 14) 黄 仁鎬「国原小京から中原小京への変遷過程研究」、考古学 12-3、2013、246-247 頁（韓国語）。
- 15) 盧 秉湜『新羅国原小京と西原小京の防御施設変遷』、忠北大学校博士学位論文、2014、141-149 頁（韓国語）。
- 16) 山田隆文、前掲 3)、38-39 頁。
- 17) 黄 仁鎬、前掲 14)、242-243 頁。
- 18) 許 仁旭「忠州邑城考」、薬城文化 14、薬城同好会、1993、28 頁（韓国語）。なお通常前近代の景観復原には地籍原図を用いるが、本稿の対象地域においては原図が確認できないため、1916 年の修正測図を用いた。原図の作成が 1914 年であるため大きな変化はないが、忠州邑城内で区画整理が行われた痕跡があり、邑城の大部分が消滅している。
- 19) 『三国史記』では新羅時代を三つの時期に細分しているが、上代は紀元前 58 年の建国から、三国時代末期の 654 年まで、中代は三国を統一して全盛期を迎えた 780 年まで、下代は豪族が割拠し新羅が滅亡した 935 年までを指す。
- 20) 轟 博志「古代朝鮮における地方都市の立地と都市プランに関する再検討—新羅溟州治所

- を事例に一」、歴史地理学 56-3、2014、1-13 頁。
- 21) 小白山脈は大韓帝国末期に日本人により命名された地質上の山脈であり、対する白頭大幹は伝統的に使用される朝鮮の分水界名である。本研究の事例地域では両者は重複している。
- 22) 朝鮮の首都漢城を發した官道が、忠州で竹嶺を越えて慶尚道へ行く道と、鳥嶺を越えて慶尚道へ行く道に分岐することを指していると思われる。
- 23) 『忠州郡邑誌』形勝条、1870 年。
- 24) 『三国史記』新羅本記第二 阿達羅尼師今三年条（井上秀雄訳注『三国史記 1』東洋文庫、1980、40 頁）。
- 25) 国府や県庁に所在する地方広域行政のための官庁。当初は忠清左道と右道に分けられ、忠州には左道の監營があり、右道の監營は公州にあった。
- 26) 新羅王京で貴族層を構成していた氏族の総称で、沙梁部のほか梁部、本彼部、漸梁部、漢祗部、習比部の計六族が存在した。小京は増加する六部層を、地位をそのままに地方へ植民するという意味合いも持つ。
- 27) 『三国史記』新羅本記第四 真興王十九年条（井上秀雄訳注『三国史記 1』東洋文庫、1980、107 頁）。
- 28) 現在の京畿道広州市。
- 29) 州の最高統治者で、州内の軍司令官を兼ねる。のちに世襲・豪族化し、新羅崩壊の一因となった。
- 30) 現在のソウル市にある北漢山（一名三角山）。
- 31) 1816 年に北漢山頂で「北漢山新羅真興王巡狩碑」が発見され、この時の巡幸によって建てられたとする説がある。
- 32) 現在の京畿道利川市。
- 33) 『三国史記』新羅本記第四 智証麻立干十五年条（井上秀雄訳注『三国史記 1』東洋文庫、1980、98 頁）。
- 34) 李 仁哲「新羅中古期の地方統治体系」、韓国学報 56、1989、46-53 頁（韓国語）。
- 35) 白頭大幹を越える場所は、朝鮮王朝時代では鳥嶺であるが、新羅時代は鷄立嶺であった。
- 36) 轟 博志、前掲 20)、6-13 頁。
- 37) 朝鮮の地籍資料では「田」は畑地をさす。
- 38) 朝鮮の地籍資料では「畚」は水田をさす。
- 39) 現在の京畿道華城郡の黄海岸にある山城。新羅から中国へ向かう際の出航基地になっていた。
- 40) 『三国史記』新羅本記第八 聖徳王二十一年条（井上秀雄訳注『三国史記 1』東洋文庫、1980、270 頁）。
- 41) 忠清北道文化財研究院、上記 8)、76-77 頁。
- 42) 朴 泰祐、前掲 2)、47 頁。
- 43) 『忠州虎岩地区宅地開発事業敷地内遺跡精密発掘調査学術諮問会議』、(財)東亜細亜文化財研究院精密発掘調査学術諮問会議第 275 集、2014、15-17 頁。
- 44) 黄 仁鎬、前掲 14)、246-247 頁。
- 45) 朝鮮総督府編『朝鮮宝物古蹟調査資料』、1942、96 頁。嶺陲に関しては築造時期に関する記録がなく、調査もなされていないので、築造時期は断定できない。なお「嶺陲」とは本書に使用された分類用語であるが、そのまま文化財名として定着している。
- 46) 朝鮮総督府編、上記 46)、96 頁。地元で離宮跡と伝えられる礎石が残ると、当時調査されている。
- 47) 轟 博志、前掲 36)、7-8 頁。
- 48) 山田隆文、前掲 3)、38-39 頁。
- 49) 黄 仁鎬、前掲 14)、242-243 頁。
- 50) 新羅最後の王の娘、徳周公主（王女）が高麗によって監禁された場所と伝えられる。1256 年の蒙古侵略時には忠州の住民が身を寄せたところ、神風や雹のお蔭で助かったという説話もある。
- 51) 朝鮮王朝英祖代の 1757 年より刊行が開始された地理書。
- 52) 正確には嶺南大路の本道は忠州邑城とは接続せず、達川津から丹月駅を経て香山里方面へ直行するので、本図の描写はあくまで忠州邑を基準とした道路体系である。
- 53) 『忠州市誌』忠州市誌編纂委員会、2001、149 頁。
- 54) 前掲 27)
- 55) 『三国史記』列伝第五 強首条（井上秀雄訳注『三国史記 4』東洋文庫、1980、128 頁）。
- 56) 『忠州郡邑誌』に転載された「築城記并銘」は、忠州邑城の修築を指揮した牧使（知事）趙秉老自身が揮毫したものであるため、そこに書かれている全周が大きく誤っているとは考えにくい。またこの銘には修築前の忠州邑城がほぼ荒廃していた様も描写され、事実上の新築であったことが窺われる。
- 57) 轟 博志、前掲 36)、7-8 頁。
- 58) 忠清大学博物館『중주 청령헌 주변 시골조사 보고서』2008、49-53。ここで三国時代の原土層から出土した円点紋印画紋土器は七世紀中盤から後半の新羅の遺跡において出土するものであり、平瓦が一緒に出土した。また統一新羅末期のものと思われる唐草紋や蓮華紋の瓦当や高麗青磁等も出土しており、試掘調査の段階であるものの、国原小京の時代から官衙の位置が動かなかった可能性が提起されている。
- 59) 李 琦錫「旧邑集落に関する研究—京畿地方を中心に—」、地理学 3、1968、31-44 頁（韓国語）。